

「底が突き抜けた」時代の歩き方 569

1960年代末の日常的な光景－40年前のクラス文集「水たまり」

大学祭変革団事件と重複する時期に村尾にとって重要な出来事があった。一つは、Aを中心に神戸市立須佐野中学校三年二組のクラス会誌を発行することになったことであり、もう一つは、日中友好学生団の一員として66年の夏休みに中国を訪問して、同時期に中国本土で発生した文化大革命に遭遇し、紅衛兵運動の熱気を生で浴びたことである。

クラス会誌の題名は「水たまり」で、創刊号（昭和41年6月12日発行）から第6号（昭和42年12月11日発行）まで続いた。創刊号のあとがき（T）によると、文集発行までに半年近くかかったとあるから、「水たまり」には二年間かかわってきたことになる。40年ぶりに手に取って全号を読み返したが、懐かしさを感じなければどの文章もとても読めた代物ではない。その懐かしさも持続させるのは困難で、辟易しながら目を通した。「水たまり」に掲載されているどの文章もここで紹介するに値しないが、同世代的にみても貧相すぎる「水たまり」の文章のなかに、村尾が意識的に言葉を覚えることになった体験があふれ返っており、このことは否定しようのない事実である。40年後の現在の村尾を振り返らせる鏡としても、それらの文章群は村尾にとって貴重な足跡と思われる。当時の文章（「現在の僕の心境」創刊号）に映しだされている村尾は、次のような若者であった。

《東清君から^{きど}気障な事を書かないようにと忠告されていますが、僕の心境が気どったものならばお許し下さい。でも、文章は^{しろもの}気どらず、ありのままの心境を述べます。実際、平和というものはつまらない、憂うつな代物だと思います。じゃ、ひっきりなしに戦争が起ってばかりいれば満足するのcaというところでもありません。戦争というものは苦しいし、常に死の危険にさらされるものだからです。勿論、僕は死ぬのはいやだし、人も殺したくない。この時点における僕はやはり僕自身であって、この後、将来にも、多分僕は存在しないだろうから。やはり、生を受けてきたからには、何かせざるまい。そのためにも命を大切にしたい。それなら平和でいいじゃないかというところ、その平和のありがたさは観念的にはわかるけれども、何か空虚な感じがするのである。又、平和な時程、命を粗末にしすぎるし、戦争などの非常事な時程、命を大事に扱います。つまり、人間というものは、どうも、常に危険にさらされていなければそのものの価値はわからないようです。空気しかり、水しかり。人間の宿命と云いましょうか。現在の自分には不満が心中でうずまいています。その不満のハケ口をある人はモンキーダンスやエレキに、ある人はデモに、僕はラグビーというスポーツに求めてきたともいえるのです。しかし、そのやっている際中はよいが、その行為が終った後には、そんな自分にも不満を

抱くのです。すなわち、一種のあせりがくるのです。従って、常に不満を抱いている自分を満足させるには修養というものがどうしても必要となります。又、こうも考えます。今の社会が悪いので、これを改革する必要があるとも考えてみます。修養の方はいざ知らず、後者の方は、自分一人で考えている雲のようなものですから、永久に解決の糸口にはなりません。従って、修養に自分の不満解消を持っていけばいいのですが、この修養というものに対して何か偽善的な臭いを感じますので、ためらっています。結局、何のことはない、全てカラ回りなのです。しかも僕は自分みたいな人間が多くいればいる程、この社会にとって困ったことだということもチャンと自覚しています。こういった人間は何をするにも、常に不満を持っているから、ある一つのことに集中できず、かえって破壊のもとになる恐れがあります。よく考えもせずに、ある行為を行って、その事に常に疑問を持つからです。そのくせ、よく努力をして頑張っている人を見ると、よく批判しがちです。だから、この頃は複雑なムズカシイ事はできるだけ避け、友達とは表面的に談笑し、麻雀に必死になっています。しかし又、こういう自分にも疑問を持ち始めたのです。何とかしなければならぬ。何とか特徴のある人生を送らねばならないと——つまり、こういった風にぐるぐると僕の頭の中は回転していきます。今迄の描写が僕の心境なんですが、僕はこのことを別に悲観もしていませんし、喜んでもいません。たゞ、青年期の一つのはしかみみたいなものだと思っていますが、こういう状態から早く脱け出さねばならないと感じ始めています。》

クラス文集「水たまり」はガリ版の手刷りで、村尾のこの文章もガリ刷りで、村尾はこの「水たまり」によって言葉を覚えていただけでなく、ガリ切りも覚えていった。第2号の発行は創刊号から半年が経過しており、村尾はその半年間に中国を訪問したり、〈 〉大での変革団企画の大学祭前夜祭に参加していた。創刊号の投稿者数は辛抱強く集め回った結果、17名であったが、その分、ガリ切りも大変であり、A、村尾、Tらの編集部の冊子作りの負担は、各々の身辺雑記で誌面を埋め尽くすには、到底報われぬものであった。したがって、第2号の「編集総括」として、《単なる寄せ集めの「文集」であるのか、あるいは、寄稿する人と読む人との討論の場となるのか、ということが問われているのです。単なる「文集」ならば、絶えず予定延期と、原稿不足でゆきづまるという、因習をなくさねばならない》という問いが突き出されてくるのも必然であった。《わたしたちは何かをしなければならないのを強く感じる。しかし、その何かとはいったい何であろうか。わたしたちは何かすることができのだろうか？》とAが冒頭に書いた第3号（67年3月30日発行）では、会員制への切り替えが告知され、第4号（67年7月9日発行）では、「会員」制について、こう説明されている。《少しでもあなたの役にたち、他のひとたちとの交流を少しでも促進させるぐらいの「水たまり」へと近づける》ために、「会員」として〈組織〉化するなかで、定期購読者が執筆者として持続する必要があるとされた。ところが、第5号（67年9月24日発行）では一転して、「次号でやめます」という声明が冒頭を飾り、廃刊理由が次のように語られている。

《「水たまり」は単に書く人たちが楽しむという目的のためにあるものではありません。あくまでも「水たまり」は、旧クラスの人びとの間で、その意見や思いを交流させるひとつの方法なのです。

創刊号以来今号まで五冊の「水たまり」ができたわけですが、この五冊をとおして読んでみますとまず第一に次のようなことがわかると思います。すなわち、一人当りの原稿の量はふえてきているが原稿の提出者の数は急速に減ってきているということです。

実際、一人当りの原稿量はふえてきましたが読みづらくて読み手は疲れてしまい、あまり読まれなくなっているようです。書き手に対する不満も手伝って、このことは、「水たまり」に対する無関心となってあらわれてきています。

この無関心は、意見や思いを交流させるという最初の目的がもはや通用しなくなってきているということを意味します。それは読み手と書き手の分離です。

編集会議などの討論を僕たちは期待していたわけですが、ここでも発言する人と発言しない人との分離が生じてきており、結局残ったのは僕たちだけとなりました。

最後に、僕たちは会員制、定期発行という方法での討論の場を残そうと考えたのです。つまり、読み手が「水たまり」に参加することがまだ出来たのです。

しかし、このことは簡単にうらぎられました。「アンケート」は読み手がこれからも「水たまり」に参加できることを示す最後の方法でした。その「アンケート」の回答を待ち続ける僕たちのところへやってきたのは秋風だけだったのです。

この秋風に耐えて僕たちは、「水たまり」の葬送曲を奏でようと思います。書き手は新しく出てこないと考えるからです。》

続いて「水たまり」の廃刊と、それに関する最後の編集会議開催が「編集委員会」名で「声明」（提案）されているが、分析の的確さと文章の巧みさから推測して、Aの文章と考えられる。

最終号である第6号（67年12月11日発行）の冒頭は、村尾の「羽田闘争と〈青春の死〉」によって占められており、村尾からすれば、「青春不要論—矛盾の最大の共存とその埋葬への賭け」（第5号）の末尾で、《ぼくは、もし〈青春〉について語るなら、〈青春〉（埴谷氏的にとらえて）を〈青春〉という一時期だけに固定させるのではなく、〈青春〉を絶えず流動していく状況への一秒、一秒へのひたすらな反応の積み重ねである人生の起伏的なものと解し》、《さまざまなイメージをぶっこわし、更にぶっこわし、イメージをどんどん変えていく時、そのイメージの転移は、何を指し示しているのだろうか。人間が果たして、そのことにどこまで耐え得るであろうか。ぼくは、どこまで自分のもつイメージを変え得るであろうか、その極限をためしてみたいと秘かに心中で思っているのである。それに自分の人生を賭けてみたいといっても言い過ぎではないだろう》と書いてきたことの連続性で、その文章は捉えられるにちがいない。

「羽田闘争と〈青春の死〉」の文章は、状況が「水たまり」を覆い尽くそうとし、編集委員会のメンバーが「水たまり」廃刊後にどの方向へ赴こうとしているかを大きく暗示

していた。21歳の村尾の文章であり、全文を転載しておく。

《10月8日、11時27分、ぼくたちの内部にフツフツと煮えたぎっていた〈生への志向〉に突然、異変が起り、するどい痛みを感じた。それは、日本、いや世界の青春のはかない、はかない希望にダメ押しの、ダメ押しであったろう。と同時に、いよいよ、来るべき時が来たという感がしないでもない。

この時刻に山崎博昭君は殺された。学生の奪った警備車にひかれたとマスコミは云う。そして慶大医学部が所見している。しかしマスコミはマスコミであるが故にあてにならないことがわかる。(例えば樺美智子さんの例など) 従ってぼくはこの報道にうさんくさい欺瞞生を感じている。だがこれをどちらが殺したかという表面的な問題に解消させてしまってはならない。彼が国家権力に虐殺されたことははっきりしている。この〈視える死〉は〈視えない死〉を代表している。ぼくたちの内部にはまた〈視えない死〉の占める領域が幅をきかせ、突破口のない不安と危機感にぼくらを駆り立てる。

現代のように明らかに倒錯した社会では、そこでの非日常的な出来事は、退屈な日常性のダシにされ、それへの安易な自己満足的な批判とで常に相殺されてしまう。その舞台裏では、確実に国家権力が黒い触手を伸しているという仕組みである。こういうバカげた芝居はよそうという行為が非日常的な行為として浮かび上ってくるだけである。まじめに人間らしく、ひたすらに生きようとする人間が現実では非日常的行為をする人間として弾圧され、大衆から石を投げられるというのは、一見当然かもしれないが、この光景ほど地獄絵にもならぬ陰惨さがあらわれている人間のかくされた歴史の重みを知らしめてくれるものはない。人間らしく生きるとは、現代ではあらゆる疎外を一身に受け、それと闘い、苦闘していくという以外に術はないであろう。

国家権力は常に、その現象面として市民(主義者)という形を帯びて浮び上ってくる。つまり、国家権力が大衆に具現されているということである。従って、ぼくたちが何かをしよう、前進していこうという行為を阻むものは、常に市民であることを知らねばならぬ。だがまた、前進の起動力となるのもその市民の一部が知的上昇していく過程から生じていくものだということも知らねばならぬ。

羽田闘争の起っている頃、一人の死者まで出した激烈な闘争が起っていることも知らずに、ぼくは須磨の海岸近くの一室で「水たまり」の編集会議に参加していた。この編集会議は通常のそれとちがって「水たまり」終刊と、その後のぼくたちの実践活動という二つのテーマをめぐって論争していたのである。この編集会議もまた、羽田闘争であらゆる既成の革新諸政党から孤立して闘っていた全学連と同様に、ぼくたちもまた「水たまり」会員から孤立して闘っていたのである。すなわち、出席者はぼくたち編集委員4名という、どうしようもない、あきれはてた、苛酷な状況にいたわけである。いつまで経っても、自らの参与する問題に没主体的にしか参加しえない人々と、そのような人々が作り出す状況、このような頹廃しきった状況の中でポッカリ浮び上がってしまい、しかし、闘争し合い、深く傷つき合っている集団が羽田闘争の〈青春〉であり、ぼくた

ちの〈青春〉でもあるのだ。

マスコミが羽田闘争を「学生の暴徒化」として報道し、キャンペーンすれば、そのような報道が、もちろん羽田にも居合わせず、マスコミから資料を得るしかない大衆は、こぞって全学連のデモを非難、血祭りにあげる。憎っくきマスコミの破廉恥さがここにある。マスコミがマスコミとして世に氾濫し、それらに踊らされている大衆、それをついでいる大衆がいる限り、ぼくたちがこの〈時代〉に主体的に参加していくことは大変困難であるが、その困難さを困難さとして、相手（大衆）につきつける（生きぬく）ことによってしか、新しい状況を生みだせないのである。それは強固な思想形成をバックボーンとする以外にないであろう。

ぼくたち〈青春〉の苦悩を臆面もなく知ったかぶりをした、明らかにマスコミの被害者の一人である大江健三郎は、羽田闘争について朝日ジャーナル（10・22）で、大人の詠嘆を発している。

つまり、大江は羽田闘争で学生が暴徒化し、ついに死者まで出さしめたということを、学生の個々の内部の緊張のきびしさの程度に求め、それは「首相の南ベトナム訪問が、学生たちの心にあたえている不安、焦燥感がどのように大きく暗いものであるかを端的に示すであろう。」と語り、独走する首相とその背後にあるものに対して、一般の市民の側から不安の声を発するにしても、首相とわれわれの間には深い淵のようなコミュニケーションの断絶があるという認識によって、その不安、焦燥感は加速度的にたかめられたものである。驚ろくべきことに大江が羽田闘争での実力阻止を「まさにこの断絶しているコミュニケーションをなんとか回復したいという願いにもとずいている。」と結論づけるにいたっては、アホらしくて、何をかいわんや、である。戦後世代の作家の第一人者かどうか知らないけれど、この程度の発想しかなしえない連中がマスコミの中にゴロゴロしているんだから、おそろしく状況は真暗闇ですよ、と唾を天に向かってはきたい思いなのだ。

大江の最大の欠陥はなんといっても、まず、全学連が単なる反体制運動にとどまらず、絶えざる反秩序を確立しようとして、どんどん衰微し、矛盾を露呈しつつある世界資本主義体制の打倒をめざし、世界共産主義革命を前提とした、日本という高度資本主義国での革命運動の一環として、未熟ながらもなされているという視点が全く欠落していることにある。この位のことは全学連の機関紙を一目読んだだけでも判然とするであろう。

ついで、大江はすすり泣いている。「……ジャカルタ滞在が、そもそもの原因をなしているところの、ひとりの若者の死について、首相は想像力を働かせることがない。想像力を働かせるとは、首相が、死んだ学生の内面にはいりこんで、あらためてこの事件をめぐる国内、国際状況の全体を展望してみることである。すくなくともそれだけの想像力の行使を首相に強いるだけの重みを、惨めに死んだひとりの学生の死体が持っているような体制をこそ、民主政治というのではないか……学生とは、もっとも敏感にこのマスコミュニケーションにみちた民主政治を求める若い市民である。」ここには、国家

権力なんてものはもとより、日本に課せられた世界資本主義の要請としてのベトナム侵略加担ないし、支配者、被支配者という階級視点のかわりに、陳腐な民主政治を表面に出すことによって、単なる人道主義（話し合い）政治のバラ色の幻想をふりまく安易さしかない。

一体、大江はぼくらの共有している〈時代〉を苦悩し、感覚ばかりが先取しているぼくたちの状況をどのようにとらえているのであろうか。もし、大江が、自分を戦後世代の一人として、いつまでもそのことに固執していて、常に世代を代表しているというバカげた自負にとりつかれていたならば、ぼくたちは、即座に彼を否定して、その幻想の椅子から引きずり下ろさねばならぬ。

大江の初期の作品に見られた、静かな怒りの〈青春〉は、今や、遠い霧の向うに散らばってしまったのであろうか。

ここであらためて、激しく流動している時代に対応し、いかに生きていくかという問が激しく内面に突き刺さってくるのである。

今や、世界は大いに揺れ動いている。南ベトナムはもとより、南米、アメリカ、中近東、中国等々。この燃えている世界状況の中で、羽田闘争の意味するものは、また、羽田闘争において空しく殺されてしまった一人の19歳の学生の死の意味するものは。

現在、必要なのは、ぼくたち一人一人がズタズタに切り裂かれてしまっている、ぼくたち個々の内部に呼応し、死者との対話にまで上昇させることなのだ。

何故ならば、彼の死はまさしく、ぼくたち青年の前にまざまざとみせつけた〈青春の死〉にほかならないからだ。》

自分と同世代の学生たちが果敢に取り組んでいる羽田闘争と、その中で殺された山崎博昭くんの〈死〉になんとか言葉を向かわせたいのだが、〈羽田闘争〉について語る言葉をいまは持ち合わせていないので、大江健三郎の見解に異議を唱えることによって、その欠落の穴埋めをしようとしているのがよくみえる文章である。セクトの言葉で欠落が穴埋めされていないのは、セクトから遠いところにいる所為であるが、そのことに無意識であるために、やがてこの文章の言葉もセクトの言葉で覆われていくことになるかもしれない予感を一方で垣間見せている。なにかを書こうとしてなにも書き切れていないし、なにかに触れている手応えも感じさせないこの文章のなかで唯一呼吸しえている箇所は、羽田闘争と同時刻で開かれていた「水たまり」の編集会議に言及しているところだろう。羽田闘争の状況と「水たまり」の状況とが折り重なる場所をкаろうじて掠め去ろうとしていたからだ。

本当なら、「水たまり」がかかえこんでいる問題、陥っている事態の上に立って、マスコミには捉えられない〈羽田闘争〉を引き寄せ、言葉を紡ぎだす必要があった。いいかえれば、「水たまり」こそがもう一つの呼吸困難に喘いでいる〈羽田闘争〉にほかならない、と言い切ってみせることができるかどうかであった。もちろん、「水たまり」の参加者にそんな力量はなかったし、遠くを見通す視力も備わっていなかった。にもかかわらず、村尾からすれば、「水たまり」の孤立を〈羽田闘争〉の孤立と重ね合わせる

ことで、自分たち世代の〈青春の死〉を見届けようとする気持が強かったのだろう。同じ最終号には、その「水たまり」編集会議で話し合われた内容がテープ(?)に採録されて、「共同討論『水たまり』の軌道をかえりみて」の表題で掲載されている。参加者はA、T、村尾の他にATである。

これまでずっとAがクラス会誌として「水たまり」の発刊を提案して主導したと思い込んでいたが、そうではなかった。65年の10月23日に開かれた最初の編集会議には、村尾もAも参加していなかった。参加者はT、ATを含む7名で、原稿が集まらなかったために、「具体的な方針を決めるまでに討論を十回程やっている」(T)。66年3月12日に二回目が開かれ、その時に村尾とAが新しく加わり、一回目と二回目の同じ参加者はT、ATと他の一人であった。村尾とAが最初から参加していなかったのは、彼らが主導的ではなかったことを意味している。

「水たまり」の創刊から終刊まで主導的な役割を果たしたのは紛れもなくAで、彼を中心に村尾やT、ATが引き寄せられているという印象が強かったために、文集もAの提案と思い込んでしまったのだ。だが、そうではなかった。村尾とAが二回目の会議から参加したのも、原稿が集まらないという窮状のためだったのかもしれない。大学進学者で小理屈をこねて鼻に付く感じがするようにみえるAや村尾は敬遠されていたのかもしれないし、Aと村尾にしても学生運動へのかかわりから、クラス文集の発行に関心を持っていなかったのかもしれない。とにかく村尾とAは途中から参加した。「水たまり」を振り返る共同討論は、65年9月に文集の提案がされたにもかかわらず、原稿が集まらなかったために創刊号の発行が翌66年6月になったことにみられるように、なぜ原稿が集まらないのか、ということが当然ながら問題の中心になった。

村尾とAが参加していなかった最初の会議ですでに、クラス文集の性格上、「中身よりもたくさんの人に書いてもらうということに意義がある」という多数派と、「何かしたいという気持」から「文集を作るというからにはやはり中味の充実したもの、つまり書いていて何か自分につかめるものがあればいいな」という少数派に分裂しており、それは少数派のATが推奨した詩が表紙を飾ったことによって、より一層表面化した。その詩は、《ここは、絶望の水たまりだ。／ここは決して、美のいる所ではない。／それよりも、醜に開拓させて、そいつがどんな世界を造り出すか見た方がよい》というものであって、多数派からクラス文集の表紙を飾る詩としては不穏な感じで、ふさわしくないという批判の声が創刊号の編集会議で多く出され、その批判は公正中立であるべきクラス文集がどこか偏った方向に進みつつあることへの懸念に基づいており、したがってその詩を採用した編集部に向けられた。

いうまでもなくこれは避けがたい対立であった。クラス文集であれ、そしていくら未熟で幼稚であったとしても、各自が「書くこと」に向かい合っていく限り、「書くこと」がクラス文集の枠組みを逸脱しようとするのは必然であったからだ。逆に言えば、「書くこと」がクラス文集の枠組みに収まっている限り、「書くこと」は持続しなかった。

つまり、「書くこと」にとってクラス文集などなんの関係もなかった。クラス文集にふさわしい「書くこと」など不可能であったからだ。多数派はもちろんのこと、少数派も「書くこと」がどういうことであるのかが全くわかっていなかった。我々から抜きん出ているようにみえたAですら、「書くこと」についてわかっていなかった。書こうとしても書けないのは、「書くこと」は「書くこと」をつくることであるということがわかっていなかったのである。

クラス文集として成立するのはせいぜい創刊号であった。クラス文集として書こうとする限り、「書くこと」はできなかったし、「書くこと」はなににもなかった。だから、クラス文集として書こうとする人たちから、第2号以降の原稿を集められるわけがなかった。クラス文集であろうとなんであろうと、原稿が「中身の充実したもの」をめざして、「書くこと」に向き合おうとする少数派からしか集まらなくなるのは当然であった。もし存続させようとするなら、2号以降の「水たまり」は原稿のみならず、読者層もクラス会から抜け出さなくてはならなかった。要するに、すべての面で「水たまり」はクラス文集としての性格を解体しなくてはならなかった。ところが、編集部にはクラス文集から飛び出して、クラス以外の読者を呼び集めるだけの力量はなかった。その矛盾に落ち込んで、「水たまり」は藻掻いていたのである。

クラス文集としての性格を大きく逸脱しつつけるにもかかわらず、読者層はかつてのクラスの人たちであるという矛盾は、会員制に切り換えたところで解消されず、会員からの原稿集めに四苦八苦する事態に編集部を追い込んだだけでなく、会員に対しても会費を払った上に原稿を要求されなくてはならない苦痛を与えることになった。更に、第2号以降の「水たまり」を担ったメンバーの間で質のよい原稿が順調に集まったのか、といえはけっしてそうではなかった。書けば書くほど、「書いても自分で納得出来るような書き方が出来ない」(AT)という問題に突き当たっていた。「自分で納得出来るような書き方」において「水たまり」は発行されつづけてきたか、を問われていたのだ。以上の問題に挟撃されるなか、各自の近況報告的な作文から脱皮するために、2号からテーマを決めて、「ひとつの問題をめぐるいろんな意見を出し、その違いとかを探ぐりながらお互いの間の意見の交流を計ろう」(A)としてきた試みは頓挫することになった。

共同討論の最後の頁には、各々の感想が次のように述べられている。

「彼らとの間に、ある共通項を見出し、それを括弧にくくるといふ点では失敗だろうな。それは明白だが、作る側にとっては、『水たまり』の裏をめぐることによって、やはりそれなりに一つの状況認識に通じているだろう。実際、よくわかってきましたよ。まず何かをやろうとすることはしんどいこと、こっちの思っていることなどで相手に伝わらないこと……。」(村尾)

「何かこんなことをすれば皆が集まって楽しくなるだろうというのが全て幻想的であるということもハッキリしてきましたよ。」(T)

「始めのうちは、文集を作るからどうのこうのと云って、書いてもらいたいんだけどと

云うと、『ハイ、書きます』といって、そのうちにいつまでたってもこないから、様子を聞きに行ったら、まだ書いてないと、そういうことが積み重なって、たゞしんどいという気持ちの方が強くなり、何の為にこんなことをしなければならないのか、バカらしい、書いてくれない人のところへ行ってなぜ頼まなければならないのかと……。」(AT)

「だから、いろんな意味でぼくらは旧クラスの人々ともともとバラバラであったのが、この『水たまり』を媒介とすることによって、そうしたバラバラがハッキリしたということでは非常にいいことだと思いますね。」(A)

「水たまり」は第6号で終刊(註一冊子では「廃刊」という用語になっている)し、その理由はいくまでも内在的な問題にあったが、村尾の「羽田闘争と〈青春の死〉」の一文にもみられるように、「水たまり」における彼らの苦闘が、〈羽田闘争〉に象徴される情動的な課題にどのように届いているかが全くみえないという外在的な理由が切迫していたことも一因であったと思われる。彼らに挫折感がほとんどなく、それどころか「水たまり」の軌^{くびき}から解き放たれて、もっと広々とした未踏の戦場へ立ち向かっていくような昂揚感がどこことなく漂っていたからだ。

「これからどうするかということも、もう一つの問題になるわけですが、それはこの文集そのものと直接関わり合いがありませんから、ぼくら自身の問題として別に考えて行くべきだと思いますね」とAが共同討論を締め括り、編集後記で村尾が、『「水たまり」がわれわれにどのような影響を及ぼしてきたかは知るべくもないが、案外各々自らの内部で秘かに根づいているかもしれない。「水たまり」の最後の課題として、諸君に「水たまり」廃刊後の「水たまり」の実践的意義は如何に?と問いかけるだけで十分であろう。』と書いているところにも、落胆よりも意気揚々さが垣間見られる。クラス文集にありがちな尻すぼみ、終刊の中途半端さから抜けだして、「水たまり」の原稿書きと編集に全力を投入し、「水たまり」の二年間を振り返る誌上の共同討論まで行って、「水たまり」を十分に埋葬してきたのだから、思い残すことはなにもなかったにちがいない。

一クラス文集にすぎない「水たまり」が6号まで継続され、考えられるかぎりでの発行の限界にまで踏み込むことによって、文章の書き方から編集の仕方まで、更に編集会議での討論のありかた及び、みすばらしい文集作りの継続のみならず、丁重な埋葬の仕方まで学び取ってきた。これまでほとんど村尾の意識に上ってこなかった『水たまり』の二～年間について丁寧に振り返ってきたのは、この「水たまり」で直面した問題が村尾の生涯の歩みのなかで何度も繰り返され、現在も同じ問題に直面しているのが感じ取れるからだ。同じ問題が反復されて押し掛かってくるその有様をみると、村尾の生きかたがそこに示されているというよりも、村尾はどうやら自分の外に赴こうとするときに、誰もがそうであらざるをえない『水たまり』的な問題を、クラス文集としての「水たまり」へのかかわりのなかで、歩みの原型として刻印されてしまったのだとみるべきかもしれない。

その後について少し書くと、67年の夏は、四回生で翌年の春にはAと同じく卒業する予定であった村尾には、就職活動を真面目に行っていた記憶はない。村尾の中では卒

業する準備ができていなかった。周囲から就職試験には旅費と宿泊費が支給されることを聞いていたので、どこでもいいから東京にある二社を受けようと思って、大学から試験を受ける推薦状のような書面をもらった。各会社から旅費と宿泊費をせしめようと計画したのである。時期は八月でなければならなかった。「水たまり」に映画のシナリオを書いていたTと村尾はその頃、映画に夢中で、とりあえずはシナリオライターを目指して、東京で開講されるシナリオ作家新人養成集中講座を受ける予定であった。

もう一社ぐらい受験すれば、費用的に潤う予定であったが、シナリオ講座の直前の時期に入社試験がある会社はちょうど二社しかなかったし、大学を通す以上、無茶もできなかった。シナリオ講座は合宿であったが、前の一週間程は板橋区にある独身の知人のアパートにTと共に転がり込み、その期間中に村尾は二つの入社試験を受けた。一社は関東では大手の中華食品会社であり、他の一社も準大手の書籍取次会社で、本当に受かったら困るので前者では白紙の答案用紙を提出し、後者ではいきなりの会長直々の面接になったため、少しノイローゼ気味の哲学青年を装って、不合格になるように仕向けた。この二社は以後、大学に求人案内をしなくなったかもしれないが、旅費と宿泊費をうまくせしめたつもりの村尾は留年した一年後、切羽詰まった就職活動でしこたましっぺ返しを食らうことになった。

シナリオ講座については安くはない講座料を支払った割にはそれほど面白いものではなく、いくつかの映画を見せられ、現役のシナリオライターや映画監督が登場して喋ってはくれるものの、カンヅメにされてたつぷりと勉強させられましたという思いはさらさらなく、野郎どもが詰め込まれた合宿生活に参加しただけであったような気がする。ただ村尾にとっては、いまでも時々振り返って思い出す小さなエピソードがあった。新藤兼人監督の講座の際に、村尾がなにか気を引く、ちょっとユニークな発言を行ったと思われるが、講座の終了後に新藤監督から撮影中の映画（確か『藪の中の黒猫』のタイトル？）に助監督として参加しないか、と誘われたのである。給料は出ないが、食事などは全部面倒をみるという条件であったが、大島渚の独立プロならと少々尊大であった村尾は即座に辞退したものの、もしあの時撮影に参加していたなら、全く違った人生になっていただろうとふと考えることがある。

映画界への進路については、大島渚の「創造社」では若い衆に親に財産はあるか、親の財産を食い潰す覚悟はあるかと問い迫られ、場所を捜すのに一苦労した「映画芸術」の発行会社（といっても、みすばらしく小さな一室）では、編集長の小川徹には会えずに、うら若い美形の女性に住所を書かされて、採用はむずかしいが後程連絡すると、一分ほどで体よくあしらわれる始末で、映画界への進出に対する情熱は高まるどころか、萎えていくばかりであった。気楽で能天気な大学生であった村尾と異なって、中学卒業後、夜間高校に通っていたこともあるTは有給休暇をやりくりしながらシナリオ講座に参加していたが、東京でブラブラしていた村尾の心を捉えたのは映画界ではなく、Tと共に何度か足繁く通った新宿の熱気であった。

新宿の街にむせ返っていた熱気は、誰もが不吉ななにかが起こるのを待ち受けているような、不穏さが漂う熱気であった。その雰囲気や仰々しく醸し出すかのように寺山修司の「天井桟敷」が花火を打ち上げ、花園神社には唐十郎率いる状況劇場の紅テントがおどろおどろしく登場した。06年7月22日付産経朝刊には「日本の残像」として、村尾とTが揺らめいて漂っていた67年夏の新宿について次のように記述（福島敏雄）されている。

《39年まえの夏、新宿東口一帯はフーテン族という異様な若者たちであふれかえった。働きもせず学びもせず、ただ終日、駅前の芝生（グリーンハウス）やベンチ、神社の境内などにたむろし、寝た。ときにマリファナや「ハイちゃん」と呼ばれる薬物を吸ったり飲んだりして、かれらのコトバを使えばラリパッパしていた。

異様な暑さだった。アスファルトの路面やコンクリートのビル壁面から瘴気しょうきのようなものが噴き出していた。ネクタイを締めた正装の男や女たちが、たいていは上半身ハダカの若者たちを異物として見くだしながら、通りすぎていった。

その周辺で、半月ほどこの街ですごした。できたばかりの紀伊國屋書店の巨大書籍に驚き、いくつもの映画館をめぐり、ジャズ喫茶に入りびたった。広いフロアの店では、「行け行け踊り」としか訳しようがない「GOGO ダンス」という、ただカラダを激しく動かすだけのダンスがはやっていた。

感知できたのは、若者たちがかもしだす無分別なエネルギーであった。だがそのエネルギーを発動させる場所はどこにもなかった。》

記者が入りびたっていた《ジャズ喫茶は靖国通りから歌舞伎町に入り、最初の道を折れ、行き止まりの路地の手前にあった。大音響のスピーカーが売り物で、連れ立って出かけても、会話などはできなかった。》このジャズ喫茶に北野武や中上健次、永山則夫などが出入りしていたのを後年知って、記者は次のような妄想をくりひろげる。

《しきりに首をカクンとひねりながら、コードを無視した、「即興こそ命」としかいいようがないジョン・コルトレーンを聴いていたのは北野武だった。後年の即興芸はコルトレーン譲りだったのかもしれないが、当のコルトレーンはちょうどその夏、海の向こうで40歳の若さで死んでしまった。

巨軀きよくを持てあましながら、内から湧き出すコトバを処理できず、苛立った表情の若者は、のちに作家となる中上健次である。その数年後、射殺体となって見つかったアルバート・アイラーの破調だらけの「ゴースト」がよく似合った。

下アゴをネアンデルタール人のようにとがらせ、伏目がちに注文を聞きにくるボーイがいた。目が合うと、目の中の黒い部分がとたんに冷たく沈み始めた。

その翌年から連続射殺魔として日本中を震撼させることになる永山則夫である。永山のバックに流れていたのは、もちろんマイルス・デイビスの「死刑台のエレベーター」であろう。》

コルトレーンの40歳での死や、数年後に射殺されたアルバート・アイラー、そして

連続射殺魔と命名された永山則夫の、酒鬼薔薇事件の煽^{あお}りを食らって死刑台に上っていたイメージを並べて記者が強調したかったのは、当時の新宿という街のどろどろとしたいかがわしさや、ただならぬ気配を漂わせている混沌とした熱気の渦中に包まれて、誰もが陰惨な犯罪者と隣り合わせになってうごめいている狂気であっただろう。記者はゴールデン街に足を延ばして、いまはどの店も《客はただのサラリーマン風の男や、どこにでも見かける若者ばかり》になってしまって、《入る気も失せ》るが、当時はこんなものっぺりとした、安全衛生の消毒剤を振り撒かれたような街ではなかったと回想する。

《当時、何回かこの街の店にかよった。店に入ると、「おぬし、デキるな」という感じのタダモノではない男が酒を飲み、長髪の若者がその周辺にまつわりつき、辛酸をなめつくしたような女が疲れた表情でタバコをふかしていた。

満員のときには、「2階、いいわよ」と言われ、カウンターわきの細い階段をのぼり、狭い座敷にはいった。壁際に細長いふすまがあり、あけると鏡が張られていた。「青線」というコトバをはじめて知った。

いま派手なネオンがあり、ケバケバしい看板が並んでいる。こんな街ではなかった。もっと薄暗く、小便臭かった。》

T シャツにジーパン、長髪のサンダル姿でTと新宿駅前広場の石畳の上に腰を下ろしていると、アロハ姿で五分刈りの小柄だが、なんとなくヤバそうな感じの兄ちゃん^{あん}が近づいてきて、いきなりボクシングの世界チャンピオンの名前を口にし、同門云々と喋りはじめ、タカられるのかなあと思っていると、そうでもなく、単なる自慢話を一方的に聞かされて時間を過ごしたりした。いまにもなにかが起りそうな気配に満ち、人々もなにか面白そうなことが起こるのをじっと待ち望んでいるかのような、そんな異変に押し込まれようとする新宿の熱気に村尾は圧倒されていたのである。その二ヵ月後の10・8羽田闘争で角材にヘルメット姿の学生たちが登場し、翌年の10・21国際反戦デーでは新宿騒乱が惹き起こされ、「68年」の世界的な規模での闘争が幕を切って落とされようとしていたのだ。

二年以上にわたって取り組んできた「水たまり」の終刊以後に待たれる課題の掌握や、変革団事件が及ぼす影響に包まれ、更には訪中で遭遇した文化大革命の天地を揺るがす、荒れ狂わんばかりの熱気がまだ冷めていないなかでの、67年夏の新宿の不穏漂う熱気に晒された村尾が向かうべき途は、情勢的には敷き詰められつつあった。先の記事の末尾には、《その夏のある日、紀伊國屋書店で1冊の詩集を見つけ》、「谷川雁詩集」のなかに「東京へゆくな ふるさとを創れ」の一節に出会って、《たしかに東京は来るべきところではない。だが創るべきふるさとなど、どこにもなかった》と記されている。谷川雁が「創れ」と言う「ふるさと」とは、もちろん故郷ではない。彼は自分の足をしっかりと踏み下ろすことのできる場所を「創れ」と言っていたのだ。村尾は「谷川雁詩集」にその夏出会ったわけではなかったが、これから出会うことになる関係を求めて、新宿の不穏な熱気に煽^{あお}られながら神戸へ帰って行った。

2006年12月1日記